

はじめに

土肥秀行

本特集は、2016年度の国際言語文化研究所萌芽研究に採択された「現代イタリア文学研究会」を母体として、立命館大学において醸成された分野横断的イタリア学の3年間の成果発表である。4名の寄稿者は、中心的な構成員としてその活動に寄与してきた。石田聖子研究員は、ポーロニャ大学で博士号取得後、帰国してからも国際会議や論集で研鑽を重ね、研究会立ち上げメンバーとしてこんにちまで関わりを保っている。現在は日本学術振興会PDとして立命館大学に籍をおき、「歴史的前衛」をキーワードに研究活動を続けている。特に、現代のイタリアを中心とした文学と映像の総合的關係に注目している。フェデリカ・スガルビ氏は、2016年度後期から本学での現代イタリア文学関連講演会に参加し、今年度は国際言語文化研究所の客員協力研究員として専らアウトプットに力を注ぐ。専門は観念論哲学で、イタリアのフェッラーラ大学とパリのソルボンヌ大学で学び著作も複数ある。ロベルト・テッロースィ氏は、2018年度、外国語嘱託講師として立命館大学に赴任すると同時に、こんにちまでの蓄積を活かした成果発表を学内にて行っている。近々、「イタリアン・スタディーズ」の入門書を日本語で刊行する予定である。ローマで美学を学び、戦後の主たる文化事象と思想潮流について細かに分析してきた。研究代表の土肥は、専門の一次大戦期の未来派とその周辺の探究に加え、近年は比較文化史のアプローチで日伊関係を追ってきた。

このプロジェクトに従事するイタリア出身者は、日本研究従事者として日本にたどりつく従来のパターンとは異なり、必ずしも日本とは関係しない分野から、伊国内のアカデミズムの困難な状況をうけて「頭脳流出」した典型である。ゆえに日本ではなくイタリアを志向するわれわれイタリア学のチームと親和性が高い。研究発表や論文における使用言語は日本語に限っておらず、むしろ伊語を使用しての活発な議論を期待している。

こうしてイタリアの知が国外に拡散するなか、例えばここ京都に再度集積する。本特集においてもバラエティある研究が集まったが、われわれの研究所のこれまでの知の蓄えに由来する磁力ゆえと考えるとよいだろう。

現在もお立命館大学の「現代イタリア文学研究会」として活動を行うわれわれの最新の活動に、国際言語文化研究所と関西イタリア学研究会 ASIKA の協力による、パドヴァ大学教授グイド・サントート氏講演会がある（2018年6月3日、立命館大学）。その講演原稿を基にした日本語論文も併録する。

